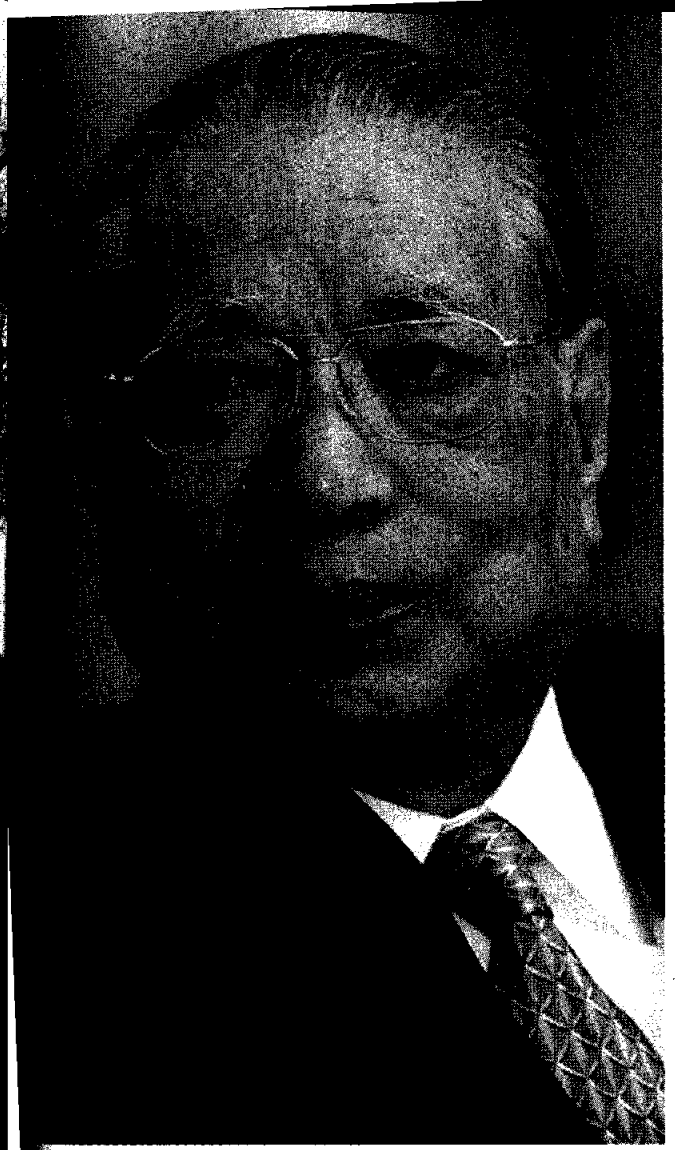
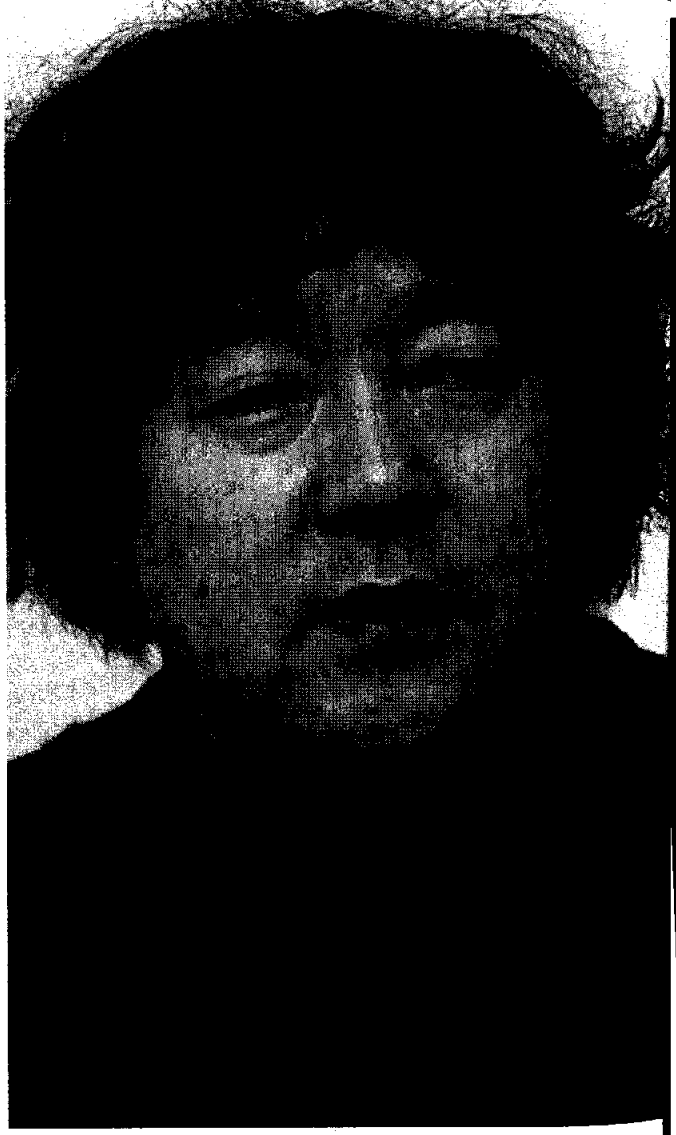
科学と宗教、その間の壁は破れるのか



創価学会名誉会長

池田大作

いけだだいさく　1928年東京生まれ。創価学会インタナショナル（SGI）会長。創価大学、アメリカ創価大学、創価学園、民主音楽協会、東京富士美術館、東洋哲学研究所などを創立。『人間革命』（全12巻）、『新・人間革命』（21巻まで刊行中）、『池田大作 名言100選』など多数の著書のほか、『二十世紀の精神の教訓』（M・S・ゴルバチョフ）など多数の対談集がある。



脳科学者

茂木健一郎

もぎけんいちろう　1962年東京都生まれ。東京大学理学部、同大学法学部卒業。同大学大学院理学系研究科物理学専攻課程を修了し、理学博士となる。『脳と仮想』で小林秀雄賞、『今、ここからすべての場所へ』で桑原武夫学芸賞を受賞。その他、『脳とクオリア』『クオリア入門』『生きて死ぬ私』『疾走する精神』『あるとき脳は羽ばたく』など著書多数。

往復書簡

日本有数の宗教組織のトップ池田大作氏と、脳科学者として科学の先端を見つめる茂木健一郎氏の往復書簡が実現した。常日頃から「宗教について議論することをタブー視してきた日本のメディアのあり方に疑問を感じる」と発言してきた茂木氏。その茂木氏からの「通俗的な話に興味はない。本質的な議論をしたい」という呼びかけに池田氏が応じる形で対話が始まった。二〇〇八年から二年間にわたり、互いに交わされた言葉は、時に緊張感をはらみ、時に温かい共感に満ちていた

第一位 茂木健一郎↓池田大作

池田大作様。初めてお便りいたします。現代における宗教の役割、今後の人間社会のあり方について、池田様のお考えをお伺いすることができればと存じます。

私は子どもの頃アインシュタインにあこがれ、大学は物理学科に進みました。その後、人間の社会の成り立ちに興味を持ち、一時期は法学部で学びました。今は脳について研究することを専門としています。

科学と宗教の関係については従来さまざまなことが言われてきました。私は、脳の働きという視点から、宗教が人間の精神生活において果たす役割について興味を持っています。

人類の歴史において重要な意味を持ち、時には一つの国や文明の運命でさえ左右してきた宗教。しかし、現代の世界においては、とりわけ、いわゆる「知識人」の間において、宗教の意義について懐疑的な態度をとる人が多いようです。

英国オックスフォード大学のリチャード・ドーキンスは、チャールズ・ダーウィンの進化論についてのすぐれた解説書をたくさん世に問うてきた論客です。二〇〇四年のイギリスの月刊オピニオン誌『プロスペクト』の読者による投票で、英国の知識人ナンバーワンに選ばれました。著書『利己的な遺伝子』の中でドーキンスが唱えた「ミーム」は、人類の文化の領域にまで進化論の適用範囲を広げるのに役立つ概念として、大きく話題を呼びました。

二〇〇六年に出版されたドーキンスの“The God Delusion”(邦訳『神は妄想である―宗教との決別』)は、欧米を中心に大きな反響を呼びました。この中でドーキンスは、宗教というものが人々の心をほかの何ものよりも強く縛ってしまうことを批判しています。

とりわけドーキンスが問題にしているのは、どんな考え方や価値観でも、それが「宗教」という名前をまとった瞬間に一切の批判を受け入れないものになってしまうという点です。科学においては、たとえある説がどれほど立派なものだとしても、実験や観察の結果と合わなければ、新しい理論にとって代わられます。ニュートンやアインシュタインの理論でさえ、もしそれが現実に合わないことがわかれば、うち捨てられるのです。一方、宗教は、一度教義が立てられると、ともすれば絶対的なものになってしまう。その点を、ドーキンスは批判するのです。

私自身は、科学と宗教が必ずしも相容れないものだとは思いません。何かを信仰することは、それに関係する脳活動を伴うことであり、その意味で宗教体験は科学的探究の対象となり得ると考えます。ある宗教の教義やその価値体系を信じるということが、人が生きる上で害ばかりなしてきたということはあり得ない。むしろ、人がこの何が起こるかわからない世の中を生きる上で資することが多かったからこそ、宗教は残ってきたのではないでしょうか？　その意味で、科学の重要な一分野である「進化論」の視点からも、宗教の意義に関心が持たれるところです。

現代における人類の知の最先端の部分で、宗教にどのような「地位」を与えることができるか？　この点において、議論されるべきことは多いように思います。ドーキンスの批判には、もっともなところがあると言わざるを得ない。一方、社会の中の大多数の生活者にとっては、そんな抽象的なことよりも、「今、ここ」の自分の生をどのように引き受け、苦しみから救われるかということのほうが重大な関心事なのかもしれません。

魂があるとか、死後の世界があるとか、そういったことに関する宗教の教義は、科学的世界観とはしばしば相容れないものとして、合理的な思考を志向する人たちから批判されてきました。一方、仏教は元来そのような問題については敢えて言及しないという「無記」を貫く。霊魂や死後の世界といった問題には、「一切答えない」というのが仏陀の根本思想であったのでしょう。

現代の科学的世界観から見れば、仏教における「無記」の思想はとりあえずは首肯すべきものと思われます。科学の先端に身を置く研究者が、しばしば仏教思想にシンパシーを感じるのは、「無記」の問題と関係するかもしれない。科学は、霊魂や死後の世界については沈黙を守るしかない。その実体を観測などの手段では知り得ない以上、あるいはトマス・クーンの言う「反証可能性」を満たす形では説を立てることができない以上、科学的に意味のあることを言うことはできないと考えるのです。

一方、素朴な生活者の立場からすれば、「無記」を貫くのは時に冷たい態度かもしれない。何でもいいから、「こうすれば救われる」と指針を示して、この世における苦しい生活から救ってほしい。死後に極楽が待っていると保証してほしい。そのような切ない人間の願いを前にして、科学者は、知的な意味で誠実であることはできても、感情の意味で善き人になることはなかなか難しいのです。

禅僧の南直哉(じきさい)さんは、長年永平寺で修行し、仏教の「無記」思想にはむろんのこと通暁した方です。ある時、お婆さんに「お坊さん、私は死んだら極楽に行けるでしょうか」と尋ねられた。南さんは、その時、「無記」などということは言わずに、「もちろんだよ、お婆ちゃんくらい苦労した人が極楽に行けなかったら、ほかに誰が行ける

の」と答えたとのことです。

融通無碍という智恵は、どれほど広く、遠くへと届いていくものなのでしょうか？

日本で最大級の仏教信徒の組織において長年にわたって指導的立場にあり、また世界各国の知識人との対談を重ねてきた池田大作さんに、お伺いしたい。人類の現在の知のフロンティアにおいて、仏教を始めとする宗教はどのような役割を果たしていて、また果たし得るとお考えでしょうか？　また、知的探究における誠実さを貫くということと、生活者の苦しみ、悩みを救うという問題との間には、どのような関係があるとお考えでしょうか？　ドーキンスの批判については、どのような感想を抱かれますか？　もし、池田さんの思索の一端でも御教示くだされば幸いです。

第二信　池田大作→茂木健一郎

茂木健一郎様。お手紙を拝見しました。脳科学者として、生き生きと対話を広げておられる貴殿との語らいを嬉しく思います。

「脳」という生命のフロンティアの探究から、私は学ばせていただきたい。とともに、この往復書簡が、「生命の世紀」を生きゆく青年たちへ、何らかの示唆を贈る一助となれば、これ以上の喜びはありません。

さて、御質問をいただいた「科学と宗教」の関係ですが、大きく三つの立場に整理できるのではないでしょうか。

第一に、科学と宗教は、排他的・対立的な関係にあるとする見方。茂木さんが挙げられたドーキンス氏は、この立場でしょう。

第二に、科学と宗教は分離しており、互いに不干渉であるべきだという立場。

第三の考え方は、両者の中道をいくものです。すなわち科学と宗教は、互恵的・共存的な関係を築くべきだ、と。結論から申し上げれば、私は第三の立場を強く支持します。

科学だけでは、「生命」また「心」という不可思議な次元の全体像はつかめません。また、「生老病死」という人間の根源的な苦悩の打開には、宗教の力こそが要請されます。

宗教、なかんずく仏法と科学が、相補い、協調し合ってこそ、人類の幸福と繁栄に向かって、大いなる価値創造の道は開かれると考えております。これは、理論物理学の権威であり、長年、無神論の世界に生きてこられた、モスクワ大学前総長・ログノフ博士と私との対談の一つの結論でありました。

私がお会いした宇宙飛行士の方々も、「大宇宙の妙なる法則」「人為によらぬ調和の力」などの視座から、仏法への共感を示されています。アインシュタイン博士も、晩年に「宇宙的宗教」「宇宙的宗教感覚」を強調しておりました。それは、歴史学者のトインビー博士と私が語り合った「究極の精神的実在」とも深く重なります。

そもそも、ドーキンス氏が批判の対象にしている「神」とは、あくまでも西洋における宗教です。東洋的な思想や宗教に対しては、不知、ないしは判断留保の状態にあることを指摘しておく必要があるでしょう。

ただし、キリスト教であれ、イスラームであれ、ユダヤ教であれ、宗教が思想や文化を育む土壌となり、人類文明の成長と発展に寄与してきた重要な役割を、決して過小評価することはできません。そのうえで、ドグマ主義的、原理主義的な宗派性や攻撃性に囚われた宗教現象に対して、警鐘が鳴らされていることは、確かであります。

また茂木さんが、科学的な知の在り方として言及された反証主義――すなわち反証可能性のみをもって科学と非科学とを立て分ける立場は、これまで科学の健全性を支えてきた重要な特徴といえます。

ただ一方で、若き学究者から聞くところによれば、最先端の科学の現場では、反証主義が常に機能するとは言い難い面もある。たとえば、物質や宇宙の究極の姿を探究する学問領域では、実験的な検証も反証もできない理論が立ち現れているといいます。

それはそれとしても、宗教が陥りやすいドグマ主義から逃れるための方法論として、「反証」と誠実に向き合う姿勢は重要だと思います。

これは、仏教の精神とも共鳴し合うものであります。

日蓮は「智者に我義やぶられずば用いじとなり」と、正当な批判を受け入れる開かれた態度を示しました。ここでいう「智者」とは、現代では「科学的知見」を包含していることは明白です。仏法では、「文証」（文献上の論拠）・「理証」（普遍妥当性）・「現証」（現実の証拠）という三つの次元から、宗教は合理的に検証されるべきだとしております。特に日蓮は「現証」を重視しました。

この視点から私は、一九九三年にハーバード大学で行った講演でも、その宗教をもつことが、人間を――

「強くするのか弱くするのか」

「善くするのか悪くするのか」

「賢くするのか愚かにするのか」

という判断の基準を示しました。

人類を引き裂くドグマ主義や原理主義を超克するために、何が重要であるか。それは、何よりも開かれた「対話」です。日蓮の「立正安国論」も、「屢談話を致さん」と「対話」形式で展開されております。

「暴力」の対極にある「対話」は、あらゆる差異を超えて、相手を対等の尊厳をもった人格と見るところから始まります。二十一世紀の知性の最前線で

宗教の果たすべき役割とは、宗派を超えて、人類を「対話」で結び、平和の創出に貢献することにほかなりません。この信念に基づいて、私も世界に対話を広げてきました。

ともに、宗教を独善や妄信に陥らせずに、正しき方向へリードしていく力とは、「教育」ではないでしょうか。教育・学問が開く英知こそ、偏見や憎悪、暴力的熱狂から、人の心を解き放つからです。教育という普遍的な「学びの広場」「知性の世界」と連動していくならば、宗教も本来の精神性を健全に発揮できます。

なお、お手紙で言及された仏教の「無記」は、もともと釈尊が、異教徒らの形而上的な偏見を網羅した、一〇ないし一四の質問（世界は常であるか無常であるか等）に対し、肯定も否定もしなかったという説話です。

「無記」とは、不可知の問題に対し、口を閉ざすという懐疑的な立場ではありません。茂木さんも著作で引かれているように、仏典には有名な〝毒矢の譬え〟があります。毒矢が刺さった時に、その矢をめぐって議論ばかりしていたら、毒が回って死んでしまう。矢を抜くことが先だという戒めです。

この点、仏教学者の中村元先生（東京大学名誉教授）も語られました。

「現代の進んだ自然科学の知識をもってしても、なおわからないことがあります」「われわれだって、解決できないことを論議している間に死んでしまう。そうではなくて、今ここに生きている人間にとって、どう生きていくかということがいちばん大切である」（『仏教の心を語る』東京書籍）

釈尊は真理の探究を尊重しつつ、民衆の救済という次元において「無記」という態度を選び取ったのです。

日蓮は、「不変真如の理（普遍にして変わらざる真理）」と「随縁真如の智（真理に基づき状況に応じて自在に発揮される智慧）」について説いております。この法理を現代的に展開すれば、宇宙や生命の〝真理の探究〟と、そこから顕現する智慧による〝民衆救済〟という慈悲の実践は、いわば車の両輪であることを示しています。両方の智慧を生かして、生活の苦しみ、人生の悩みを打開していくという意義になりましょう。

茂木さんが多次元から発信されるメッセージにも、普遍的な学理とともに、現実を心豊かに勝ち抜く智慧が示唆されています。まさに「危機から創発を生む力」を引き出しゆく新たな開拓であり、深く共感しております。

人類を引き裂くドグマ主義や原理主義を超克するために、何が重要であるか。それは、何よりも開かれた「対話」です。「対話」は、あらゆる差異を超えて、相手を対等の尊厳をもった人格と見るところから始まります

池田

第三信 茂木健一郎 ↓ 池田大作

そこで、「信じる力」は、人間に秘められている力を、どう開発させることができるのでしょうか。さらに、人間の知性の本質に関わる「対話」「コミュニケーション」は、人間の脳にどのような変化をもたらすのでしょうか。また「青年が良き師匠をもつこと」の意義を、脳科学的な見地から、お聞かせください。

池田大作様。私の拙い手紙にお返事をいただき、ありがとうございます。仏教における「無記」の意義や、現代の科学における「反証可能性」の役割についてのご見解など、大変興味深く読ませていただきました。

池田さんが「対話」の大切さを強調されたことを、とりわけ重要なメッセージとして受け止めました。立場や背景の違いを超えて言葉を交わすことができるということこそ、人間の人間たる所以ではないでしょうか。

実際、人生の大先輩である池田さんとこうして対話させていただくことは、私にとってかけがえのない学びの機会となっています。改めて心からのお礼を申し上げます。

現代の世界においては、宗教や文化、政治的信条など、立場の違う人たちの間での対話が何よりも求められていると思います。その際、大切なのは、対話が目的としていることをイメージすることではないでしょうか。立場が異なっていても、人間として共有する価値は必ずあるはずです。差異をいたずらに強調するのではなく、認め合うことのできるかけがえのないものを探ることこそが、何よりも尊いと考えます。

二人のバックグラウンドを異にする話者が、目指すものについて認識を共有して初めて、対話は実りのあるものとなる。目的とすることが暗黙のうちにでも同意されなければ、対話は時に腹の探り合いや、誹謗中傷に終始してしまいます。

何気ない日常の幸せ。平和を願う気持ち。一人ひとりがそれぞれの可能性を実現すべく努力する自由を与えられること。人間である以上共通して持っている価値観に依拠すれば、政治的立場や、宗教、信条の違いなどは、超えられぬ障壁ではないと思えてきます。

池田さんが世界のさまざまな人々と対話を重ねてこられた背景には、立場や背景の違いを超えようという思いがあったと推察いたします。対話が私たちの未来において果たす役割について、どのようにお考えでしょうか？

池田さんが関心を寄せておられる、

「青年が良き師匠をもつことの意義」についても、一般に人が育つ上での対話の大切さという文脈の中から新たな光を当てられるものと考えます。

人間は、もともとは一人ひとりが孤立している存在です。原理的には、人間の認識は「脳内現象」としてそれぞれの脳髄の過程に閉ざされている。にもかかわらず、言語的、あるいは非言語的コミュニケーションを通して心を通わすことができるということは、尋常ならざる福音です。

人間の脳の前頭葉には、自分が何かをしても、また相手が同じことをするのを見ていても活動する「ミラーニューロン」と呼ばれる神経細胞が存在します。この細胞があるおかげで、相手のことを自分に置き換えて理解することができます。ミラーニューロンの働きにより相手の気持ちを慮ることができるからこそ、対話によって心を通わせることもできるのです。

英国に生まれ、米国の大学で教鞭を執った言語学者ポール・グライスは、対話において大切なのは「協調原理」だとしました。対話においては、二人の話者がお互いに相手に配慮し、協調することが何よりも重要だと考えたのです。

グライスの言う「協調原理」を支えるのは、ミラーニューロンを中心とする相手の心を慮る脳の神経回路です。私たちの脳の中には、対話を通して、共通の目的を実現するための潜在能力が備わっています。競争や対立を前提にしたコミュニケーションではなく、お互いに助け合うための対話の必要性を考えると、脳の構造や機能は、社会の意識よりも前に、人類の未来を先取りしているように感じます。

私たちの社会の現状は、脳の本来的潜在能力に追いついていません。

意味のない対立は止めなければならない。とりわけ、ともすればぶつかり合いがちな宗教各派の間で、平和や幸福追求の自由といった人類普遍の目的を視野に入れた対話が行われる必要性は、日に日に増しているのではないでしょうか。

私自身の経験を通しても、宗派というものは本来お互いに必ずしも相容れないものではないと感じられます。

私の家は浄土真宗でした。仏壇があり、毎朝お線香を上げていました。法事の時には、お坊さんがいらしてお経を上げていました。その一方で、子どもの頃からさまざまな宗教に触れる機会がありました。

母方の親戚には、江戸時代末に成立した宗教の教会を営んでいる人がいました。毎月私の母あてに機関誌が送られてきて、活字中毒だった幼い私は熱心に読んでいました。人生の悩みや苦しみを抱えた人たちが、救いを求めている様子がありありとわかりました。夏休みに遊びに行き、教会の大きな祭壇の前に座って独特な儀式の様子を見守ったこともあります。

中学校になると、友人に誘われてキリスト教の教会の日曜学校に通いました。賛美歌を皆で歌いました。牧師さんのお話を聞き、「原罪」の観念に強く惹きつけられたこともあります。

池田さんがずっと指導されてきた団体の方にも、何回か話を伺ったことがあります。私の友人の中には、熱心な会員になった人もいました。目を輝かせて思いを語るのを、じっくりと聞いたことがあります。

イスラエルに旅した時には、イエルサレムでイスラム教の聖地である「岩のドーム」を訪れました。モハメドが昇天したと伝えられるその岩が、何の説明も装飾も、特別な設いもなく、むき出しのままにされている様子に心を打たれました。偶像崇拝を禁じるイスラムの厳しさを感じたのです。

隣接する「嘆きの壁」では、ユダヤ教徒たちが熱心に祈りを捧げていました。古代より伝わる神の言葉に、宇宙に真理が隠されていると本気で信じている人たち。その真摯な姿に強く印象付けられました。

それぞれの現場で、真剣に宗教に向き合っている人たち。その群像を思い浮かべ、これまでの経験を振り返ると、触れる機会のあった宗教のすべてに、幸せになりたい、隣人と平和に暮らしたいという人類の願いが込められているように感じました。どんな宗派にも、共鳴すべき点がある。それぞれの教義に、耳を傾けるべきことがある。私は、宗教的資質を持つ人間だったのかもしれません。

それでも、結果としてどのような宗派にも正式に所属しなかったのはなぜなのか、私にはわかりません。あるいは、一つの団体に所属することに伴う堅苦しさのようなものが、私には受け入れにくいものだったのかもしれません。

池田さんは、多くの人を指導する立場として、信仰と組織の関係については、深い洞察をお持ちではないかと思います。組織はなぜ必要なのか。宗派は相容れないものなのか。ぜひともお考えをお聞かせいただけたら幸いです。

それにしても、人間が、それぞれの脳髄の境界を越えてお互いに意を通じ合うことができるのは、何という奇跡であることでしょう。

現代のコンピュータの理論的基礎を築きあげた英国の数学者アラン・チューリングは、「対話」する能力こそが人間の知性の本質であると考えました。人工知能研究者たちの長年の努力にもかかわらず、人間のように対話できるコンピュータは未だにできていません。

驚異は日々の生活の中に始まっています。日常の中で何気なく交わしている私たちの言葉は、きわめて高度な脳の働きに支えられているのです。

言葉は、私たちの生の感触をとらえ、定着します。

菫ほどな小さき人に生まれたし

夏目漱石はこんな愛らしい俳句を詠みました。

大きな物語だけが人生ではないと考えます。日常こそが、底光りしている。池田さんが日々の生活の中でどのようなことを考えていらっしゃるのか、大変関心があります。

池田さんにとっての、日々の小さな喜びとはどのようなものですか？　どんな時に、生きていることの充実を感じますか？　お忙しいスケジュールの中で一人の人間に立ち返る、その私秘的な時間の一端にでも触れることができましたら幸せです。

第四信　池田大作→茂木健一郎

茂木健一郎様。私の提示した「対話」の可能性に対し、深い賛同をいただき、ありがとうございます。

茂木さんが生き生きと語られる脳科学からの視点は実に示唆に富み、お話を伺っていて、常に新しい発見の喜びがあります。

対話から学ぶ。対話で開く。対話によって結ぶ。対話には、新たな価値を創造する大いなる力があります。これは、世界各国の市民、また指導者や識者と語らいを重ねてきた、私の結論であり、確信でもあります。

では、どうすれば、差異を超えた対話が可能か。ご指摘の通り、それは万人が共有する普遍の価値観に立脚することでありましょう。

私の恩師である戸田城聖・創価学会第二代会長は、よく語っておりました。「日蓮をはじめ、釈尊、キリスト、マホメット（ムハンマド）といった宗教の創始者たちが一堂に会して『会議』を開けば、話は早いのだ」と。

それぞれの時代状況は異なるにせよ、創始者たちは共通に「民衆の幸福」を願い、「生命の尊厳」を教え、「平和」という人類の普遍的価値を土台としております。同じテーブルについて胸襟を開けば、肝胆相照らし、必ずや世界の平和と繁栄に向かって手を携えたにちがいありません。

何のための宗教か。人間の幸福のためにこそ宗教はある。後世の弟子たちが宗祖の「原点の精神」に立ち返るならば、決して相容れないことはない。そこには、より普遍的で人間的な広がりを回復し、対立を超克する対話の土壌が必ず生まれます。

事実、私個人も、キリスト教、イスラーム、ユダヤ教、ヒンズー教、儒教など、異文明・異宗教との間で実りある対話を進めてきました。

もちろん異なる世界との対話には、双方の共通性・普遍性を見出すとともに、相違を理解し、認め合う作業が避けて通れません。その根本は、同じ人間として相手を最大に尊重し、違いから学ぶことではないでしょうか。

脳には、相互の理解と協調を助ける神経細胞がある――。茂木さんから「ミラーニューロン」のお話を伺って、私は、人間の生命に本然的に具わった豊潤な社会性や、平和への志向性に、改めて感銘しました。また、「鏡」といえば、日蓮の一文にある譬えを思い起こします。

「鏡に向かって礼拝を成す時、浮かべる影また我を礼拝するなり」――相手の生命に尊敬をもって働きかければ、その尊厳なる生命を呼び覚まし、自らも荘厳されると説くのです。

仏法では、すべての人間が等しく、最も尊い仏の生命を具えていると説いています。

法華経に登場する「不軽菩薩（ふきょうぼさつ）」は、その名の通り、誰人の生命も軽んじない。一人ひとりを礼拝し、最大の敬意を表する。それゆえに自分が軽んじられ迫害されても、決して屈しない。非暴力の対話を勇敢に貫き通して、人間生命への尊敬を訴え抜いていくのです。

対話とは、人間を最大に信ずる営みです。そして生命に秘められた創造の力と智慧を共に引き出し、解き放つ挑戦でありましょう。

この点は、茂木さん御自身が、勇んで「人生の具体の海」に飛び込んで、対話を重ねておられます。茂木さんの眼差しには、探究の光とともに、他者への尊敬の温もりがある。

人間の脳は、どんな苦難や障がいにも負けず、無限の可能性を発揮できるという希望のエールは、仏法の生命観とも響き合っております。

ところで、茂木さんが宗教的なものに惹かれつつも、特定の宗派に所属できなかったという御心情は、よく理解できます。というのは、私も、終戦まもない一九四七年に十九歳で創価学会に入会しましたが、宗教や組織というものは好きになれなかったからです。

戦時中の日本は国家神道に染められ、結果として敗戦という憂き目にあった。誤った宗教こそが、民衆を不幸に陥れる根源ではないか――そう思えてならなかったのです。

新たな精神の指標を求めていた私の前に現れたのが、戸田会長でした。簡明直截、天衣無縫、豪放磊落――それまでの宗教家のイメージとは全く違う。決定的だったのは、戦争に反対して牢に入った人物であったことです。私は生涯の師匠と仰ぐことを誓いました。

ですが、入会後に触れた一部の威張った先輩の権威的な態度には、どうしても馴染めなかった。ある時、私は、その思いを率直に恩師に打ち明けました。すると「ならば君自身が、本当に好きになれる、理想的な人間組織をつくればよいではないか」と言われたのです。

戦時中、学会は軍部政府から弾圧され、組織は壊滅。初代会長は獄死させられました。その悔しい経験から、恩師は、仏法の哲理の深化とともに、揺るぎない民衆の平和組織の確立を決意

しておりました。その推進力を、私たち青年と庶民の母たちに託されたのです。

組織といっても人間の集まりですから、好き嫌いはある。意見も千差万別です。だからこそ、差異を超えた対話が必要となります。

私たちでいえば、その一つの場が、地域で月一回、行っている座談会です。これは、一方的な説法でも、講演でもない。老若男女、職業や立場を超えて、誰もが自由に発言できる。焦点は、そこに集った一人ひとりの幸福です。

「人間革命（自分自身が変わる）」という哲学を学び合い、励まし合いながら、各人が課題に挑戦する活力を漲らせていく対話の場です。

考えてみれば、現代人は皆、何らかの組織や団体に所属しています。家族や地域などの共同体、学校や会社、自治体や国家も、広い意味での組織といえるでしょう。人間が行う、いかなる営為も事業も、組織なくしては成り立ちません。事業が大きくなればなるほど、それだけ広範で堅固な組織が必要となる。

釈尊は「サンガ」――すなわち「仏道修行に励む人びとの集団」を大事にしました。自らの内面世界に閉じこもるだけでは、決して成道は叶わない。同じ志を持った人間同士の切磋琢磨こそが、重要とされたのです。

ミラーニューロンは、生命が共感性を有することの証左でしょう。人間は、他者との活発な相互作用や、社会との豊かな結びつきの中でこそ、真に自分らしい個性を輝かせ、みずみずしい創造性を開発できる存在ではないでしょうか。

組織といっても、その本質は、人と人の繋がりであり、生命と生命の連帯であります。

現代社会の脆弱さは、人間関係の希薄化にあると指摘されます。特に地域社会において、心と心の通い合う対話の復興は重要です。

組織は生き物です。大きくなれば、硬直化、官僚主義化する傾向がある。そうならぬために、どうするか。私が理想とする組織の眼目に据えたのは、恩師から教わった、会員に徹して奉仕するという根本哲学です。ゆえに寸暇を惜しんで、一人ひとりの会員の方々との心の交流を第一に行動してきました。

したがって、お尋ねをいただいた「日々の喜び」も、全世界の会員の喜びの姿や報告を目にすることです。学会草創期からの功労の同志、社会の荒波で奮闘される壮年や、健気に信仰を貫かれる婦人の方々、伸びゆく青年諸君、新入会の友、そして世界の友人たちがいます。その一人ひとりが、この信仰を通して、胸を張って人生に勝利し、輝いていくことが、私たち夫婦の祈りであり、喜びなのです。

また私の創立した創価学園や創価大学、アメリカ創価大学の卒業生たちが、世界中から近況を知らせてくれます。

その成長と活躍の便りほど、嬉しいことはありません。この教育機関の設立も、恩師から託された事業です。

脳の新たな可能性を開拓しゆく青年たちへ、ぜひ励ましのメッセージをお願いします。

第五作 茂木健一郎↓池田大作

お手紙をいただき、ありがとうございます。

東西を隔てていた壁が崩壊してから二〇年経ったベルリンで、これまでのやり取りを改めて読み返しておりました。私のような若輩者に、池田さんが胸襟を開いて対してくださったことに、深く感謝しております。

ドイツにおける冷戦の象徴は消え去って月日が経ちました。しかし、人間の社会の中には、今もなお数多くの「壁」が存在し続けているように思われます。そんな中で、誤解に基づく対立が、まるで「化石」のように温存され続けているケースも多いようです。

もともと、私が「池田大作さんとお話ししてみたい」という希望を抱いた理由の一つは、日本のメディアの中で、池田さんが長年指導されてきた「創価学会」、及び池田大作さん御本人の扱われように違和感を抱いていたという点にあります。

全国に百万人単位の会員が存在する創価学会。そこに集う人たちにとっては、生きることの糧、支えになってきたのでしょう。ゆかりの深い「公明党」は、一〇年にわたって連立政権に参加してきました。そのように日本の中で大きな意味合いを持ってきた組織に向き合うことが「タブー」であるような状況はおかしい。そこには、人工的につくられた「壁」がある。そのことによって、大切な対話が閉ざされている。そのように感じてきました。

少なくとも、自分たちと同じ社会の構成メンバーのうち、かなりの人たちが関わっている組織に対して、温かい関心を抱かないのは良いことなのでしょうか。自分の隣人に対する眼差しを閉ざしてしまうことは、どんな場合にも正しいこととは思えません。私は、多方面に大きな影響を及ぼしてきた池田大作さん御本人と対話することで、「壁」を溶かしてみたいと願ったのです。

その過程で、一般のメディアの中で報じられている池田さんの姿とは異な

私が対談したトインビー博士は、「悩みを通して智は来たる」との箴言を大切にされていました。「悩みと智慧」の関係、また「慈悲が智慧の源泉となる」という点について、脳科学の目から、所感をお聞かせください。

る、一人の人間が浮かび上がってくるのではないかと期待しておりました。その期待は、裏切られませんでした。これまでお手紙をやりとりする中で、池田大作さんのすぐれた学識、人間が生きるということの困難や喜びについての深い洞察が伝わってきました。また、組織の功罪についても、さまざまな思いを抱かれていることが感じられました。

おかげで、「壁」の向こうが少し見えてきたように思います。本当に、ありがとうございました。心から、感謝いたします。

すでに申し上げたように、私自身は、どんな宗教組織にも関係しておりません。子どもの頃から、さまざまな団体の方とお話をする機会がありました。一番最近では、取材で訪れたソルトレークシティで、モルモン教の方々とずいぶん話し込みました。しかし、結果としてはどの組織にも所属しようとは思わなかった。ある特定の組織と関わることによって私の心身に起こるであろう変化を、警戒する気持ちが人一倍強かったのかもしれません。

これからの時代を考える上での一つのキーワードは、「脱組織」ではないか。組織という括りを離れて、一人の人間として自由に活動することが、大切になるのでは

茂木

組織というものは、時に不便なものです。宗教に関わる組織だけの話ではありません。たとえば、「大学」という組織で言えば、「入試」や「卒業」といった決まり事があります。「入試」という通過儀礼を経なければ、大学という組織の恩恵を受けることができない。キャンパスの容量などの物理的制約から、ある程度は仕方がないことと

は言いながら、そのことによって、人と人との自由闊達さが随分失われてきているように思います。

仮に、尊敬できる先生がいたとして、その人に師事するためには、「入試」という制度を経て、その大学に「所属」しなければならない。インターネットによって世界が瞬時に結ばれる時代に、そのような壁は、いかにも不自由に思われます。

私は、これからの時代を考える上での一つのキーワードは、「脱組織」ということではないかと考えています。下手をすれば、さまざまな組織というものが壁になってしまう。組織という括りを離れて、一人の人間として自由に活動することが、大切になるのではないかと考えるのです。

幕末の志士、坂本龍馬は土佐藩を脱することで、思いのままに活動する自由を得ました。二十六歳の時、郊外にある和霊神社に参拝した龍馬は、「吉野に桜を見に行く」といって、そのま

ま土佐を離れていったのです。

当時、「脱藩」は、もし捕まれば本人は切腹、縁者にも累が及びかねない重罪でした。龍馬の行動には、今日の日本で会社を辞めるというのとは比較にならないほどの重みがあった。それでも、行き詰まっていた当時の日本を打開するためには、脱藩せざるを得ないと龍馬は思ったのでしょう。

よく知られているように、脱藩した後の龍馬の活躍は目覚ましいものでした。勝海舟に会いに行き、その人柄に惚れて弟子入りします（龍馬は、当初は勝海舟を暗殺するために会いに行ったという説もあります）。脱藩仲間を集めて、「貿易商社」である「亀山社中」（後の「海援隊」）を結成。武器などの輸入を行います。長州の桂小五郎と薩摩の西郷隆盛の間を取り持ち、「薩長同盟」を結ぶことに尽力しました。明治新政府の体制に影響を与えた「船中八策」を立案。そして、世界史上でも希に見る「無血革命」であった「大政奉還」を実現します。

大政奉還が成った直後、何者かに京都で暗殺された坂本龍馬。幕末という激動の時代を、目覚ましい活躍を見せながら駆け抜けたのです。疑いなく「偉人」の一人である龍馬ですが、その人となりは現代の私たちと比較して、決して遠い存在ではないように思われます。

「寺田屋事件」において、危うく難を逃れた坂本龍馬は、妻のおりょうと一緒に霧島へと日本で初の「新婚旅行」に出かけます。「強さ」よりは、むしろ「優しさ」や「共感力」で周囲の人々を動かした坂本龍馬。今日の私たちにも手が届くように思われる存在だからこそ、龍馬は根強い人気を持ち続けているのでしょう。

龍馬の活躍は、「土佐藩」という組織の論理に縛られていては、とても不可能だったことでしょう。組織というものは、人間の自由闊達な精神を時に奪ってしまうものです。今日の大学における「入試」などの手続きがあっては、龍馬が勝海舟に即座に「弟子入り」することは不可能だったことでしょう。組織を離れて自由に考え、行動する勇気を持っていたからこそ、龍馬は新しい時代を切り開くことができたのです。

もちろん、世の中には、組織がなければできないこともたくさんあります。一つの思想、ある生き方をあまねく届かせようとすれば、いろいろと妥協したり、我慢したりしなければならないこともあるのでしょう。組織というものは、結局、社会的存在である人間が持っている「原罪」のようなものなのかもしれません。

池田大作さんは、世界のさまざまな方々との対話を重ねることによって、日本という社会を実質上「脱藩」されたのではないかという思いがよぎります。今回、お手紙をやりとりさせていただくことで、池田大作さんの肉声、一人の人間としての息づかいのような

ものを受け取ることができたことは、幸せなことでした。組織という発想にとらわれて、個人を見ることがなかなかできないというのが、現代の日本の悪弊なのでありましょう。

池田さんがトインビー博士と対談された折に博士が発せられたという「悩みを通して智は来たる」という箴言、大変重く受け止めました。おっしゃるように、「悩む」ことで、人は生きるということの深い意味に思い至り、そして叡智に達することができるのではないでしょうか。

脳科学を研究している私のもとには、現代の日本を生きる若者たちから、多くの悩みが寄せられます。明るい未来をなかなか思い描くことができない社会の中で、自分たちの生き方を設計することができないでいる青年たちがいるのです。

悩むということは、つまりは、世間で前提とされてしまっていることをそのまま受け入れることなく、自らの頭で最初から考えようとすることです。苦しい道ではあるけれども、それ以外に叡智に達する方法はない。先がなかなか見えないという時にこそ、真理は実はすぐ横にあるのです。

人間の脳の中には、特定の目的や文脈にとらわれずに活動する時に起動される「デフォルト・ネットワーク」と呼ばれる神経回路網があります。正解がなかなかわからない。そんな中で、懸命に模索する。そのような心の状態の時にデフォルト・ネットワークは活動します。

脱藩する。悩む。壁を乗り越えようとする。今までのやり方を越えて未踏の地に踏み込もうとする時に、脳のデフォルト・ネットワークが支えてくれる。お話を伺って、池田大作さんの生涯そのものが、そのような悩みと迷いの積み重ねであったのだと確信いたしました。だからこそ、池田さんは、さまざまなことを見て、感じ、自分のものとすることができた。

池田大作さんの言われる「慈悲」は、現代社会の中にあるさまざまな壁を乗り越える原理になってくれるのでしょう。人は一人ではない。お互いに悩みや不安を分かち合うことができる。「共苦」という、人間の脳に備わったすばらしい働き。もし、現代人の「生まれ出づる悩み」を分かち合う場として機能するならば、その点において組織に積極的な意義を見出すことができる。

ベルリンで、壁についての資料館を訪れました。印象的だったのは、壁ができるプロセスについての記録写真でした。一九六一年八月に始まった壁の建設。最初は、その高さも低く、どこか牧歌的な雰囲気さえ漂います。子どもたちが肩車をして壁の向こう側を見たり、壁のこちら側と向こう側で、手を振って挨拶をしたりしているのです。

最初はやわらかな印象さえあった壁。それが、徐々に高くなり、やがて兵士が監視する無人ゾーンが出来上がります。壁を乗り越えて向こう側に行こうとする者は、狙撃される。多くの人が、東西分断の犠牲になりました。

最初は大した壁ではないと思っていても、油断しているうちに、いつの間にか行き来ができない絶対的な障害になっている。似たようなことは、私たちの社会の中にたくさんあるのではないでしょうか。

池田大作さんの言われるように、「悩み」を共有すること。そして、「慈悲」の心を持って、他者に接すること。そのような気持ちを忘れなければ、壁はいつか壁ではなくなるのではないかと確信いたします。

多くのことを学ばせていただきました。本当にありがとうございました。お便りの文面から伝わってきた温かいお人柄の感触、決して忘れません。

なかなか光が差さないかにも見える今日の世界の中で、未来にささやかな希望を抱きつつ、ペンを置かせていただきます。

第六信 池田大作→茂木健一郎

温かな思いにあふれた、ベルリンからのお手紙、感銘深く拝見いたしました。

芳書に記されていた通り、人生も社会も、立ちはだかる「壁」との戦いの連続でしょう。茂木さんが探究されている脳科学からは、壁があればあるほど、それを乗り越えゆく英知を引き出そうという息吹が伝わってきます。

茂木さんとの往復書簡を通して、私のほうこそ新鮮な啓発を受け、多くのことを学ばせていただきました。心より御礼申し上げます。

書面を拝見し、私も、一九六一年十月に、初めてベルリンを訪れた日のことを思い起こしました。東西対立の象徴となった分断の「壁」が築かれ始めて、二カ月後のことです。

ブランデンブルク門の手前では、霧雨の中、銃を担いだ兵士たちが警備に立ち、装甲車も走り、厳戒態勢が布かれておりました。

東西の境界線となるベルナウアー通りには、そこかしこに花束が置かれていました。東から西へ逃れようとして、建物から飛び降りて亡くなった方々へ、市民が手向けた花です。銃弾の跡も、痛ましく残されておりました。

案内してくれた壮年のドライバーが、親族と引き裂かれた悔しさを涙ながらに語っていたことも、忘れられません。

私は、同行の青年たちと心に期しました。

「どんなに強大な権力の壁も、心まで分かつことはできない。対話の力で心

と心を結んでいけば、『壁』は必ずなくせるはずだ」

当時、私は三十三歳。この若き情熱のまま、一民間人として対話の波を世界へ広げてきました。

それから二八年後、ベルリンの「壁」は立ち上がった民衆の手で崩されました。「人間がつくった問題は人間によって打開できる」ことの証明の劇であったとも言えましょう。

歴史転回の指揮を執られた統一ドイツのワイツゼッカー初代大統領とお会いしたのは、「壁」の崩壊から二年後のことでした。

この折、私は大統領に尋ねました。

「多くの人々は、東が西に学ばねばならないと言います。しかし、むしろ、私がお聞きしたいのは、東のほうが西よりも優れている点は何かということです」

哲人大統領は、質問に込めた私の心を汲んでくださり、東の人々の「連帯する力」など、「精神文化の財産」への敬意を語られました。そして「大切なのは、互いに尊敬し合って、見つめ合うことです。相手を見下すことは許されません」と結論されたのです。

二十一世紀も、新しい一〇年へ進んでいます。

「異なる他者と学び合い、尊敬し合うこと」——人類は今こそ、この共通の地平に立つべき時を迎えているのではないでしょうか。心を結び、力を合わせて、打ち破らねばならぬ〝分断の壁〟は、いまだ幾つもあるからです。

分厚い壁を勇敢に突き破り、新しき時代を開いた先例として、茂木さんは、坂本龍馬の「脱藩」を挙げられました。

私の恩師も龍馬が大好きでした。よく龍馬の話を、青年に聞かせてくれたものです。

暗殺される九日前、龍馬は若き同志の陸奥宗光（のちの外相）に書き送っております。

「世界の話でもしようではないか。最近は、おもしろい話も、興味深い話も、実に実に山のようにたくさんある」

大政奉還を成し遂げた功労者でありながら、栄誉栄達などには少しも汲々としなかった。

「藩」に続いて、龍馬は日本という「島国」の壁も、愉快に飛び越えて、世界との連帯の航路を創りゆこうとしていたのでしょう。

中国や韓国の私の友人にも、龍馬に好意を寄せる人は少なくありません。

龍馬の挑戦——それは、現代の日本社会に垂れこめた閉塞感を打ち破りながら、新しい知の世界を生き生きと開拓されゆく茂木さんの尊き努力とも、相通じます。

「壁」を破れば、新たな視界が開ける——このことを、大乗仏教の精髄である法華経は、壮大なドラマを通して示しております。

法華経の舞台構成は、「二処三会」と言われます。これは、二つの場所で三つの会座がもたれることです。

全体の二十八品（章）のうち、前編の第一章から第十章までは、釈尊は、インドに実際に存在する「霊鷲山」という岩山で法を説いたとされます。

それが、中編の第十一章から第二十二章では、舞台は一転して「虚空」という大空間に移ります。ここでは、地球大のスケールの荘厳な宝の塔が出現します。そして釈尊とともに、一座の衆生も、その虚空会へと引き上げられるのです。おとぎ話のように聞こえる物語の展開は、不可思議な人間生命の大きさとダイナミズムを表現しているともいえましょう。

大地は、いうなれば、生老病死の苦悩が渦巻く現実の世界です。これに対し、虚空とは、仏の広大無辺の境涯です。そこには、時間や空間の制約も超えた、永遠にして自在無礙の生命力が満ちあふれています。

虚空会に連なった衆生は、釈尊と同じ尊い境地へ向上していくことができる。

譬えるならば、地上において、目の前の壁と悪戦苦闘していた心が、その壁を悠々と見下ろせる天空の高みへ一挙に上昇するのです。

それは、茂木さんが志向されている「人間の自由闊達な精神」とも響き合うものでありましょう。

トインビー博士が、オックスフォード大学に一時亡命していたアインシュタイン博士の逸話を紹介されたことがあります（『交遊録』、長谷川松治訳、社会思想社刊）。

——ナチスとの戦いの渦中にあっても、あまりにも自由闊達なアインシュタイン博士に、ある教授は思わず尋ねた。「何を考えているのですか」。すると、アインシュタイン博士は答えた。「この地球は、要するに、きわめて小さな星にすぎない、ということです」と。

ともあれ、私たちの生命が、本来、どれほど、伸びやかな広がりをもっていることか。

ゆえに、どんな困難な壁に直面しても、決して押しつぶされない。いかなる壁も勝ち越えゆく智慧と力を、人間は「心の宇宙」から湧きいだしていくことができる。

これが、脳科学とも深く共鳴する、法華経の励ましのメッセージなのです。

法華経の後編の第二十三章から終章では、舞台は、「虚空会」から「霊鷲山」に戻ります。すなわち、霊鷲山→虚空→霊鷲山という往還になります。

師・釈尊の教えを受けて、自らの尊貴な生命に目覚め、崇高な使命を担い立った弟子たちは、再び悩みの絶えぬ現実世界へ突入して、人々のための行動を貫いていくのです。

その精神を、仏法では「願兼於業」（願、業を兼ぬ）と説きます。すなわち、衆生を救済しようとする願いの力によって、あえて悪業の世に生まれ、人々の苦悩を引き受けて戦う心です。

たとえ、自分は一人で悠々と自由を謳歌できる境遇にあったとしても、そこから、民衆の幸福のため、社会の平

和のために、勇んで人間群の中へ飛び込んでいく生き方です。

仏法の目から見るならば、人を幸福にできる人が真に幸福である。人を自由にできる人が真に自由なのです。

日本の軍部政府に弾圧された二年間の獄中闘争にあって、この法華経の生命尊厳の哲理を深く体得したのが、戸田会長です。恩師は、その真髄を「人間革命」運動として現代に蘇生させ、民衆組織を創り上げてきました。

軍国主義に苦しめられた恩師ですから、軍隊に象徴される組織悪も嫌というほど知悉していました。しかし、だからこそ、庶民の一人ひとりが強く賢く向上しながら、連帯しゆく組織を構築しない限り、日本はいずれまた、権力の魔性に翻弄されてしまうと憂慮していたのでしょう。

「貧乏人と病人の集まり」という悪口をも、むしろ誇りとしながら、恩師と私たち弟子は悩める友と固く広く手を携えてきました。

恩師は「戸田の命よりも大切な民衆の組織」と遺言し、この庶民の和合を世界へ広げゆくことを、若い私に託されたのです。

太平洋戦争の悲劇の激戦地の一つであったグアム島に、五一ヵ国・地域の代表が集ってSGI（創価学会インタナショナル）が発足したのは、一九七五年一月のことです。

この折、私は署名簿にサインを求められ、国籍欄には「世界」と記しました。今、仏法を基調とした平和・文化・教育の連帯は一九二ヵ国・地域に広がりました。

北は経済危機と戦うアイスランドからも、南はサッカーのワールド杯が開催される南アフリカからも、それこそ世界中から四六時中、間断なく報告が届きます。一通の手紙やメール、一枚のファックスの向こうには、必死に現実と格闘している友がいる。一回の会合をとっても、集った方々の人生は、みな違う。十人いれば十の悩みがあり、百人いれば百の苦しみがあります。

しかし、その一人ひとりが必ず「人間革命」をして、自他共に幸福を勝ち開くことができる。この希望の哲学を、わが友に贈りゆくために、私たちの組織があるのです。

今日、多くの人々は、「組織は所詮、悪に転化するものだ」というシニシズム（冷笑主義）を抱いているといっても過言ではありません。

その背景には、二十世紀のナチズムやスターリニズムがおぞましいまでに見せつけた、「組織のための人間」という悲惨な転倒があります。さらにまた、硬直した官僚主義の冷酷さなどに接する時、組織を「原罪」に譬えられた茂木さんの心情もよく理解できます。

茂木さんの「脱組織」という問題提起は、「組織の中に、果たして人間主義は可能なのか」という問いかけにも置き換えられるでしょう。

「人間のための組織」なのか、「組織のための人間」なのか。どんなに善意から生まれた組織であっても、やがて「組織のための人間」という転倒や硬直化は避けられないのか——。

私自身は、「人間のための組織」は可能であると信じております。いな、人類は「人間のための組織」の創造に永遠に挑んでいかねばならないと、確信しております。

核兵器の廃絶のために生涯を捧げられた、パグウォッシュ会議のロートブラット名誉会長が最晩年に渾身の力で取り組まれたのも、若い科学者のための組織の結成でありました。

茂木さんは語られました。

「もし、現代人の『生まれ出づる悩み』を分かち合う場として機能するならば、その点において組織に積極的な意義を見出すことができる」と。まったく同感であります。

ダイヤモンドは、ダイヤモンドでなければ磨けない。人間も人間でなければ磨けません。個々人が孤立化を深めゆく現代社会にあって、青少年を励ましゆばしゆく教育力の結合、さらにまた、高齢者を護り支える地域力のネットワークは、ますます切実に要請されているのではないでしょうか。

アメリカの未来学者ヘンダーソン博士は、一人の母として、子どもたちを苦しめる環境汚染に立ち上がり、草の根の市民運動を広げてきた女性です。この博士との対談で深く一致したことがあります。

それは、民衆自身の手で、一人ひとりの精神を目覚めさせていく「民衆の民衆による民衆のためのエンパワーメント（力を与えること）」こそ、世界を真に変革していく原動力になる。そして、各人が自立して成長を続ける組織をつくるためには、何にもまして、女性の意見、母たちの声を大切にしていかねばならない、ということです。

紙幅の都合で、茂木さんとの往復書簡が、ここで終わらねばならないのは残念です。

しかし、私は茂木さんの「脳」の探究の中から、新たな希望の光が輝き出ることを信じてやみません。人間生命こそ、人類の永遠の「フロンティア」なのですから！

かつての小学校の担任の先生が、世界を飛び回る私の健康を案じ、お手紙をくださったことがあります。そこには「高く茂れる木は、強い風に耐えねばならぬ」との励ましが綴られておりました。新時代の天空へ屹立する知性の大樹たる茂木さんに、この一言を謹んでお贈りしたい。

ともあれ、壁との戦いは永遠に続きます。先日、再会した、冷戦終結の立役者ゴルバチョフ元ソ連大統領とも、私は、「どんな壁も必ず打ち破れるのだ」という勇気を、今再び、青年に贈っていこうと約し合いました。

若き世代の先頭に立たれる茂木さんのますますの御活躍を心から祈りつつ、私の拙い筆を置くことにします。ありがとうございました。